

## 前川五郎左衛門家文書『由緒并仕来り書』

はじめに

渡邊 忠司

ここに紹介する史料は、佛教大学附属図書館所蔵前川五郎左衛門家文書（以下前川家文書）の「由緒并仕来り書」である。同史料は享保二〇年（一七三五）一二月に設置が触れられた、近世京都の「御用米会所」の由来と仕法に関する記録である。前川家文書は初代の莊兵衛が延享三年（一七四六）以降に京都に出て奉公し、その後恵比須屋莊兵衛の名で金融業を創業し発展した京都商人の文書群である。前川氏は代々莊兵衛を名乗り、両替商を始めて蓄財し、特に金貸業を商いの基盤として、後には京都糸割符仲間に加わる有力な京都商人の一人となった。<sup>〔1〕</sup>

御用米会所は、二條城蔵詰米（城詰米、備蓄米）の入れ替えに伴う市中払い米を管理する機関であったが、享保二〇年以後は京都の米屋（米商人）が管理するようになり、米方とともに貸付方の運営も米屋の管理に変更された。前川家文書はこの京都御用米会所の運営に関わる文書群であり、ここに紹介する「由緒并仕来り書」はその設置

の経緯と運営の仕法を知る上で、貴重な記録である。京都米会所に関する研究はほとんどないが、前川家文書には恵比須屋の営業記録が豊富にあり、これまでの研究不足を補う貴重な資料群でもある<sup>(2)</sup>。

ここでは二條城蔵詰米の市中の売り払いに関する基本的な事実関係を確認して、当該史料の持つ意義に触れておく<sup>(3)</sup>。

# 一 大坂・二條・天津の蔵詰米と払い方

近世の二條城は、畿内・西国の將軍直轄領の村々が年貢米を納入する、大坂御蔵(大坂城内と難波蔵)および大津御蔵と並ぶ納入蔵である。畿内・西国直轄領からの納入高は、『京都御役所向大概覚書』(以下『大概覚書』)によると、正徳から享保初年にかけて二條御蔵に米三万石から四万石、大豆三〇〇石から四〇〇石で、大坂・大津と合わせると城詰米は一〇万石にのぼった<sup>(4)</sup>。

## 大坂・二條・天津御蔵詰米大豆之事

### 一、大坂御蔵詰米石高五万八千石

右者五畿内・近江・丹波・播磨々納、不足之時丹波・石見・出羽・越後米等江戸御勘定所々割賦足詰、

### 一、二條御蔵詰米石高三万石余々四万石余迄、

右者五畿内・近江・丹波・播磨々も納、

### 一、大津御蔵詰米石高四千石程

右者近江

一、大坂御蔵詰米大豆石高式千石余

右者摂津・近江・丹波・播磨、年々不同、

一、二條御蔵詰大豆石高三百〇四百石余迄、

右者摂津・近江・丹波・播磨、年々不同、

右大豆者御蔵詰之外余慶分ニ有之候得者取払銀納ニ申付、

ここには年貢米納入地域が、大坂御蔵・二條御蔵へは五畿内・近江・丹波・播磨、大津御蔵へは近江からとなつてゐる。大坂御蔵は五万八千石、二條御蔵は最大四万石、大津は四千石の収納であつた。大豆は摂津・近江・丹波・播磨から納入されたが、固定はされていなかったとある。

これら蔵詰米は軍事目的による備蓄米であるが、大坂御蔵は元和五年（一六一九）の直轄地以降、大津御蔵は慶長五年（一六〇〇）以降、二條御蔵は少なくとも寛永二年（一六二五）以後、伏見城に代わつて畿内・西国を統制する行政・軍事的役割を果たすようになってからのことである。いずれの御蔵も入れ替えが毎年行われ、市中払いもあつた。『京都町触集成』（以下『集成』）は元禄五年（一六九二）以後の払い米の記事を載せるが、その最初の記録は大坂御蔵の大豆と米の「現銀売払入札」の元禄五年六月十八日・七月十七日の触である。<sup>(5)</sup>

〔六月一八日触〕

覚

一大豆千九拾四石五斗余

内三拾三石四斗余

豊前今井九右衛門納

一大豆式千六百七拾八石余

三田次郎右衛門納

右者於大坂御藏現銀御売入札有之間、明十九日ヨ来ル廿五日迄之内、淡路屋敷へ家持請人召連參、根帳二付、大豆見届、同廿六日之朝五つ時分札披候様ニ、売人共へ可申触事、

六月十八日

「七月一七日触」

覚

一大坂御藏米午年五畿内米貳千六百石余

右者現銀御売入札有之間、明十八日ヨ来ル廿一日迄之内、淡路屋敷江家持請人召連參、根帳付、指交米見届、翌廿二日之朝五つ時分札披候様ニ、売人共へ可申触事、

申七月十七日

ここには払い米・大豆の手続きが示されている。入札の触れのあと、入札を望む米屋は蔵奉行屋敷に家持町人を請人に参上して、入札「根帳」に署名し大豆や米を見届け、その後町奉行から「札披」(ふだびらき、開票)の日時を「売人」に知らせていた。たとえば、大豆の場合は六月一八日に入札の触があり、それを請けて米屋は一九日から二五日までの間に、淡路屋敷つまり二條蔵奉行淡路守へ請人とともに入札に出向き、二六日の朝五つ時(午前八時ごろ)の開札を伝えられている。

この手続きを見ると、京都の蔵奉行が入札を取り仕切っていたようであるが、これは大津・二條御蔵の払い米・大豆の場合も同様であった。しかも大坂・大津・京都の米商人に対して同等に入札の機会を与えており、また大坂御蔵詰米の不足を丹波・石見・出羽・越後米などを「江戸勘定所」から割賦して足し詰める(6)とあるように、

徳川政権が江戸も含めて統一的な備蓄米および払い米体制をとっていたことが知れる。

## 二 二條城蔵詰米の払い方

寛永二年（一六二五）、二條城は伏見城の廃城に伴い軍事的な役割も担うようになり、二條蔵詰米は軍事的な色合いがさらに高まったとみられる。それが最大四万石におよぶ蔵詰米の維持であった。その御蔵は寛永二年から元禄三年（一七〇〇）まで三三戸一四棟あり、一戸前一二五〇石から一七五〇石を収納することができた。<sup>7)</sup>

寛永二年以後は蔵詰米の入れ替えと市中払い米が毎年あったと見られるが、それが記録で確かめられる時期は、今のところ寛文八年の京都町奉行所の成立以後といえよう。しかし『集成』は元禄五年以後の触書を書き留めているから、正確なところは同年以後のこととなる。したがって二條蔵詰米・大豆の管理と払い方については、少なくとも元禄五年以後については、京都蔵奉行の管理のもとで、大坂・天津の米商人らと同等に入札に加わっていた。

それが大きく変化した時が享保二〇年（一七三五）であった。京都町奉行は享保二〇年一二月、京都・天津の米屋に対して「口触<sup>8)</sup>」を出した。

口触

京都米屋

頭取役

坂本屋善兵衛  
伏見屋嘉兵衛  
奈良屋市兵衛

頭取役  
大津米屋  
木屋久兵衛

組頭役  
京都米屋  
多田屋善兵衛  
長浜屋嘉兵衛  
三文字屋市兵衛

組頭役  
大津米屋  
錢屋九兵衛

此度右之者共、京都大津米屋頭取役并組頭役申付候之間、向後売買之儀、諸事伺下知可申渡条、差図を請可申候、若違背致候もの於有之者、急度可相答候、  
右之通京都惣米屋共江相触可申事、

如十二月

右御触状、米屋斗早々相触候様被仰付候、以上、

十二月十二日

この口頭での下知申渡は、京都・大津の米商人に対して頭取役と組頭役の指示に従った商いをすることを命じている。ここに記された頭取役・組頭役はそれぞれ京都で三人、大津一人であったが、これはここに紹介する「由緒并仕来り書」に、この年一〇月に京都東・西御奉行立会の上で京都・大津の「米筋御用」を頭取四人・組頭四人に委託されたことを記している。<sup>9)</sup>そこではここに上げられている八名が京都・大津の区別なく、頭取役と組頭役に任命されたことが書き上げられている。

この口触での申渡は、同年一二月五日には京都町々米屋に対し、同七日五つ時(現在の八時頃)に京都東町奉行

所への出頭を指示している。すでに京都・大津での米商売を商人の管理に委ね、この時期、米値段の下落と、京都市中での「近在百姓」の米「素人直買」が多くなり、旧来の米屋仲間による米商売の管理が難しくなっていたことに対応しようとしていた。<sup>(10)</sup>

この対応は米相場が下値になっていたため、それを高値に戻すことが目的であった。徳川政権が米相場の高騰を意図して対応した米相場は大坂の米市場で、享保改革の一環であった。大坂の場合は、江戸の町人冬木善太郎らによる米会所設立の願書とその商人による堂島米会所の設立にみられる。享保一四年のことである。会所は翌年に延売買の公認によって廃止されるが、同一六年以後は正米商内と帳合米商内が取引の中心となった。<sup>(11)</sup>

### 三 「由緒并仕来り書」の概要

京都の御用米会所の設置も米相場値段の引き上げを意図しており、享保改革に伴う一連の対策であった。徳川政権・京都町奉行が二條・大津御蔵の払い米・大豆の差配と入札管理を米商人へ委託し、入札による米価の引き上げを狙っていたことを示している。その準備が享保二〇年に入って急速に進められていた。

これは城詰米が基本的には大坂夏の陣を最後に軍事的性格を失い、城郭守衛の役職・任務に就いた家臣団また京都在住の与力・同心等への切米・扶持方等に用いられるように性格を変えていたこととも関係している。<sup>(12)</sup> 享保一五年（一七三〇）には、徳川政権は城詰米を「江戸御貯米」「大坂御囲米」「二條御囲米」と表示するようになっており、<sup>(13)</sup> 二條御囲米は一万石に減らされているが、元禄一三年以前は新米への入れ替えがあり、その払米は京都・大坂・大津などの米商人による入札を経て京都・大坂等の市中に流通していた。これを下落した米価引き上

げの手段に利用したのが京都御用米会所の設立であったといえよう。

史料は京都御用米会所の設立の経緯とその入札に関わる手続きを知る記録である。その概要をみておこう。

記録は享保二〇年(一七三五)一月から文政一年(一八二八)正月に至る。冒頭に御用米会所の設立の趣旨と、京都・大津米屋共を取り締まる頭取役・組頭役の書き上げと、一四ヶ条の払い米に関する入札の手続きと米売り払いに関する注意事項が定められている。

このときの最初の米屋数は一九五〇軒あったと記し、その頭取役と組頭役はさきの享保二〇年二月「口触」のそれと同一である。また米商売の者は「湊株」「地株」「荷株」による売買に携わっており、入れ替わりは頻繁にあるとし、増減の人数などは名前帳で差し上げているとも記している。

米会所の設立以後、寛延二年(一七四九)、宝暦二年(一七五二)、四年、五年、十一年、明和七年(一七七〇)、九年と細かい改変を経て、明和九年には大津表の御用米会所が京都から引き離され、「御定札」が書き改められた。また安永四年(一七七五)には「新規・定式御囲米并御遣方残米・御大豆」などを会所が引き受ける定が出され、新たな米屋頭取三名と組頭三名が決め直されている。

この後も米会所印札の改めがあり、米屋頭取と組頭は度々入れ替えられている。また米相場会所が各所に設置され、冥加銀の上納も記される。たとえば安永二年には「新御囲米」一万石の請負の場合は一萬石につき二四貫三〇〇目の冥加銀を差し出すとし、払い米高の増減に応じて一石につき二匁四分三厘の割合で冥加銀を差し出す積もりであるとも記している。

宝暦一二年には、御所の買上米三五〇石があった。これを最初として以後は毎年一〇〇石・二〇〇石・五〇〇石程度であったが、明和四年・五年には三千石・四千石を五畿内米で調達するようにとの条件を付けられ、しか



も「利徳」が少ない御用で、入札もなく米会所の値段積もりでの調達ということで、困惑しながらも禁裏の御蔵へ納めた経緯も記される。

### おわりに

二條城御蔵の払米は、大津御蔵も含めて、管轄は寛文八年以後享保二〇年までは京都町奉行所にあり、払い米に関する実務は京都蔵奉行が担当していた。御蔵払い米に関する研究はさきに拙稿で触れたように多くない。<sup>(14)</sup>これは京都に関することではないが、多くの場合それが史料の不足にあることは間違いない。それに加え、近世京都・大津における米流通や金融について、あまり関心を持たれていなかったこともその一因であろう。<sup>(15)</sup>

史料では、米会所の由来と機構の記録とかなり細かい御払い米に関する記録が続くが、京都御用米会所の業務内容の実態はかなりの程度明らかになる記録である。詳細は史料本文を参照したいが、とりあえず、享保改革との関連において考察される必要があり、京都・大津市中の米流通の実態に限らず、徳川政権の米価政策の実態を明らかにする一助ともなることを指摘しておきたい。

なお、史料の閲覧・翻刻に際しては、佛教大学附属図書館の御高配を得た。記して謝意を表する。

キーワード…御用米会所、二條城蔵詰米、入札、払い米

〈注〉

- (1) 前川五郎左右衛門家文書第四卷、「解説」(尾脇秀和氏執筆)参照。
- (2) 『京都の歴史』第五卷・六巻は近世編であるが、京都米会所に触れるところは多くない。最近米会所の概要について若干の研究が出されている。前掲「解説」および稲吉昭彦「近世後期京都における御用米会所貸付方の独立と恵比須屋莊兵衛」(『佛教大学総合研究所紀要』(別冊2)、二〇一三)。
- (3) 二條城蔵詰米と京都商人の関わりについては、筆者も概要について検討した。拙稿「近世二條蔵詰米と京都商人」(『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第十号、二〇一三)。
- (4) 『京都御役所向大概覚書』上巻、三九六頁、清文堂出版、一九七三。
- (5) 『京都町触集成』第一巻、岩波書店、一九八三。
- (6) 前掲『京都御役所向大概覚書』上巻。
- (7) 元禄一三年には大津の蔵奉行が廃止され、その管轄も京都町奉行となった。『京都御役所向大概覚書』および前掲拙稿「近世二條蔵詰米と京都商人」参照。
- (8) 『京都町触集成』第二巻、二六四頁。
- (9) 「由緒并仕来り書」の「最初奉頂戴候御定書」と題された記録。史料本文一二頁参照。
- (10) 『京都町触集成』第二巻。「由緒并仕来り書」。
- (11) 『新修大阪市史』第三卷第四章第三節参照。
- (12) 前掲拙稿「近世二條蔵詰米と京都商人」参照。
- (13) 『京都町触集成』第二巻。「由緒并仕来り書」。
- (14) 前掲拙稿「近世二條蔵詰米と京都商人」。
- (15) 幕府財政に関する研究には大野瑞男『江戸幕府財政史研究』(吉川弘文館、一九九六)、飯島千秋『江戸幕府財政の研究』(吉川弘文館、二〇〇四)を参照。

史料翻刻『由緒并仕来り書』 凡例

- 一 本史料は佛教大学附属図書館所蔵の「前川五郎左衛門家文書」の京都御用米会所に関する史料の翻刻である。
- 一 翻刻史料の表題は原文に従った。
- 一 本文翻刻にあたっては、表記は原則として常用漢字を用いた。但し、変体仮名は現行の字体に改めたが、助詞として用いられる「江（え）、者（は）、而（て）、茂（も）、与（と）」についてはそのまま用い、小さく表記した。また異体字（躰・𪛗・𪛘・合字（𪛙）などもそのまま用いている。
- 一 そのほか翻刻の際、翻刻校訂者による注記を掲げておく。  
貼紙・付紙・付箋などは「」で示し、右肩に（貼紙）（付紙）（付箋）などと付した。  
印判は（印）、花押は（花押）等で示した。
- 一 虫損・破損および判読不能部分については、字数の確認できる部分は□の数で示し、確定できない場合は「ムシ」で表示した。  
原本の抹消・改変の部分については、判読できる場合は左側に「ミ」を付して表記した。  
誤字・脱字については、誤り・脱字が明らかである場合は傍注（ ）で表示した。
- 一 固有名詞や地名・人名は原則として原文表記に従った。
- 一 史料の翻刻にあたり、記事中の読点を新たに付け、翻刻校訂者が行った変更部分は（ ）または「」を付けて表示し、注記を付した。
- 一 翻刻については、編著者渡邊忠司と池田晶・新木慧一・金山真樹が主に担当した。但し、原稿の調整、編集その他の作業については編著者が行ったので、本文に関するすべての最終的な責任は渡邊にある。

史料 『由緒并仕来り書』

(表紙)

由緒并仕来り書

御用米會所

一 御用米會所被為 仰付候儀、七十五年以前享保貳拾年卯十月東於 御役所兩 殿様御立會之上、京大津米屋之内ニ而頭取四人・組頭四人米筋御用之趣被為 仰渡御定書奉頂戴、且又兩 御役所ノ御用之趣被為 仰渡候御事、依之御用米會所与申掛札被下置候御事、

右米會所被為 仰付候訳、其節米相場下直ニ付御定直段御触書被為 成候而、米相場高直ニ相成候様御政道被為 成候御事、

然ル処、有米多ク御払米不捌ニ而御入札致候者茂、一向無御座程之時節ニ御座候、依之米筋御用之儀多ク御座候得者、折節を考素人之者共々米會所相願候者有之由被為仰聞、米筋御用之儀者素人之者共取計ニ而者末々ニ至リ米屋共難渋之筋茂可有之哉与被為 思召、御用米會所不寄存米屋共江被為 仰付候ニ付御請奉申上候、當時ニ至

リ退役之儀相願候得者、代リ役米屋共之内江被為 仰付相続仕来候御事、

取初奉頂戴候御定書左之通

定

一米屋頭取

坂本屋善兵衛  
伏見屋嘉兵衛  
奈良屋市兵衛  
木屋久兵衛

一米屋組頭

多田屋治左衛門  
長濱屋長兵衛  
三文字屋四郎左衛門  
錢屋九兵衛

一二條御藏御払米有之節者頭取并組頭承之、米屋共江触流し仕、順宣大勢召連出候様可致事、

一 壹万石御圍米之儀者重而者頭取并組頭引請、銀上納等之儀も是迄之通可相勤事、

一 入札之節者米屋共大勢組合候而茂入札為致、直段上ヶ等茂有之候様可致吟味事、

一 御藏御払米御役料等之儀者申渡有之次第入札茂為致、札人

無之節者頭取并組頭引請、米屋共江割渡相捌候様ニ可仕事、  
一諸渡米致方右同斷、

一会所手代共諸方より之入米等吟味可致事、

一日々之相場書御役所江当番頭取、組頭名前ニ而差出可申候、  
尤頭取・組頭持參可仕候事、

一大津米屋共之儀者京都ニ准シ相勤可申候事、

一京都・大津米屋共増減相届惣躰之触流シ末々迄無滞可致事、

一京・大津米屋共惣数増減茂相知候ために候間、会所々印札  
相渡置可申事、

一毎月京都・大津米屋共買入・売出委細書付両 御役所江差  
出可申事、

一大津表 公儀御蔵御払米有之節、米屋共入札無滞為致可申  
候、尤大津米屋共不勝手之儀茂有之候ハ、京都之米屋共

茂召連罷越、入札茂為致候様可仕候事、

一上京・中京・下京之内米屋之内耆人宛月行事附置、触流茂  
為致候様ニ可致事、

一大津表米屋共之内耆人宛月行事附置触流シ為致候様可致事、  
右之通無相違相勤可申事、

享保二十年 伊賀

卯十二月

長門

一毎日米相場書差上、其外臨時平均相場二條御蔵御払米之節、  
御見合相場御払米御用之儀不殘相勤候様被為 仰付候事、

一毎日書上仕候五畿内米相場之儀ハ、大坂表上米相場二京都  
迄之運送掛り物相加江候上五畿内ニ引当、米屋共毎日立会  
売買仕候、尤大坂表前日相場を翌日之相場ニ相定奉差上候、  
全大坂表之相場ニ随ひ、運送掛り物等相増相定申候儀相違  
無御座候御事、

一二條御蔵御役所江茂相場書毎日差上候御事、

一御払米之節御触書之趣早々触流シ仕、御米見御入札之節米  
屋召連罷出、万一望人無之節者米会所江奉引請、京中米屋  
共江割渡、直段宜敷相捌候様ニと御下知奉蒙居申候二付、  
御払米引請割渡候儀も御座候御事、

但シ

寛延貳年巳四月

大津御蔵米千九拾石余御払、落札直段下直二被 思召入直  
シ被 仰付候処、又々下直二御座候二付、先落札人江被  
仰付候得共、日数相定相場茂下直二相成候儀故御請不申上、  
依之米会所江被仰付候、新御圍米引請候者共々割渡代銀御  
日限之通上納仕、御米引取申候御事、

又宝曆二年申十二月

御所御蔵米千四百石御払、落札下直二被 思召御見合被遊

候処、其後相場下直ニ相成、依之米会所江被 仰付、新御園米引請之者共江割渡、落札直段ニ而代銀上納仕候御事、

又宝曆四年戊三月

御所御蔵米六百五拾石御払被為 成候処、御米痛御座候而落札直段下直ニ御座候ニ付、米会所江被 仰付、落札直段ニ増を加御請申上、新御園米引請之者共江割渡申候御事、  
一新御園米壹万石、重而ハ京都米会所頭取・組頭江引請上納等仕候様被為 仰付候御事、

一新御園米壹万石御請負之儀、享保十九年寅八月十八日上京・中京・下京米屋年行事之者共西 御役所江罷出候様被為 仰付、御当地ニ而身元宜米屋人数申上候様被 仰付、則上京・中京・下京六拾人人数申上候御事、

一同廿日上京・中京・下京株立米屋六拾人被 召出被為 仰付候事、去ル子年御収納米西国ニ御返納米壹万石御貸シ被遊、其代リ新米と詰替、いつ迄も右壹万石御園被遊度旨、右積リ仕方之儀御尋被遊候御事、

一同廿四日六拾人之者共不殘罷出候様被 仰付、西御役所本多筑後守様於 御前從

御江戸表之 御書御誦聞かセ被遊、新御園米壹万石御払被為 仰付候御事、

一同廿五日又々右之人数被 召出、壹万石詰替之儀者御止メ

ニ相成リ御払ニ被為 仰付、御米代銀百五十日限りニ御預被為 成候間、随分直段出情仕請負證文差上候様被為 仰渡候、勿論定式御払米障リニ不相成候様相考買請候様被仰渡候事、

附リ、京都之儀者米筋ニおゐて手狭キ所ニ御座候得者、定式御囲米・新御園米同様ニ御払被為成候而ハ、御直段も自ラ出兼可申哉と奉存候、新御園米御払之儀格別ニ被為 仰付候上者、定式御囲米ニ相障候儀無御座候段奉申上置候御事、

一同廿七日壹万石御請負申上、千石弐千石宛度々御払可被遊旨被 仰渡、其時々相場ニ者随分出情仕買請可申上旨六拾人連判一札差上ケ申候、尤年々之事ニ候間違無之様可相勤旨被 仰渡候御事、

一新御園米代銀貸附之儀、御米壹万石会所六人之者共引請、時々相場ニ御直段宜敷奉買請、猶又御太切之御米代銀ニ而候間念入貸附可申候、若相滞候節者早速申上候様被為 仰渡、則元文二巳年貸附證文御案文被下置候御事、

附宝曆五年亥八月

御米代銀諸向江貸附之内、相滞候分会所ニ御取立奉願候節者御日限被 仰付方西東御勘定方御同様ニ被 仰合被下候御事、

但シ御札之上冥加銀差上候後者、右貸附銀相滞候節御取立之義東 御役所江奉願候御儀ニ御座候、

附明和五年子十一月

右貸附引当之家屋敷御欠所ニ相成候分者、家代銀私共江被下置候様奉願候処、西

御役所御評議之上、前々之通願之趣御聞届被成下、其後貸附引当御欠所ニ相成候分者、御払代銀米会所江被下置候御事、

一 右新御囲米壹万石奉請負候儀、連年右之通仕来り相勤申候処、安永貳年巳正月右奉請負候御冥加銀奉差上候様被為仰付、依之御冥加銀出方精々相考、右百五十日延御利足并御米代貸附相滞候者も有之候ハ、為御替銀貸付同様ニ御取立等奉願、右壹万石ニ付式拾四貫三百目御冥加銀可奉差上旨御請申上候、尤御米御払高増減ニ応シ壹石ニ付式匁四分三厘之割を以御冥加銀奉差上候積リニ御座候、右之通被為 仰付候ニ付、定式御囲米壹万石并御遣方残米・大豆等新御囲米取計ニ准シ、御冥加銀奉差上御請負可奉申上候様被為 仰付、是又御請負奉申上候御米捌方之義、新囲米乍同様請負人身元宜米商売手広仕候者共、新規百五十人連印を以請負證文奉差上候御事、

但、毎年請負證文相改奉差上候、此義者商売人盛衰之品

ニ随ひ、或者除キ又者相加商売体見計候上ニ而人数相定候故、毎年人数不同ニ御座候事、

一 享保廿卯年会所初り候節、米屋増減相知候ため印札相渡置

可申旨、御定札ヶ條之内御記置被為 下候御事、  
取初惣米屋之數千九百五拾軒御座候、

附 元文五年申九月

於米会所印札相改申候御事、

附又延享三寅年四月

於米会所印札相改申候御事、

又寛延貳巳年六月

東於 御役所新入株替之者共江印札御渡被 成下候御事、

又明和三戌年

於米会所印札相改、同四年

亥八月

於 御役所御吟味被 成下、其後毎月株替り品替り新入之

者共拾人式十人程ニ而も於 御役所印札御渡被 成下候

御事、

又宝曆十三未年十二月

洛中洛外江御触被成下、無印札ニ而米商売致候者、并株違取捌致候もの共御吟味之上御咎メ可被 仰付候段御触状被

成下候御事、

一 当時米商売仕来候者共

湊株

右者二條御藏米其外大坂・大津諸湊ニ而直買之株

地株

右者二條御藏米其外大津・伏見問屋より買取、湊直買不相成

候株

荷買

右者自身荷ひ買牛馬ニ而米穀取寄候儀不相成候株

都合米屋数

右増減之儀者新入株替り御座候節、商賣相止メ申候者共とも二名前帳奉差上置候御事、

一 寛保式戌年糠直段高直二付、京廻り村々牛馬持より奉願、

白米之直段拾式ケ一之割を以糠菰石之代ニ相定、御役相勤候牛馬持江糠売渡候様米会所并米屋中江被 仰付候、依之

米会所より所々ニ寄所米屋仲ケ間江申渡、糠入用高積り立、年々下直ニ売渡候御事、但シ御役牛馬飼料之外者相對を以

売渡候様被仰 付候御事、

一 宝暦十辰年京・大津米屋中より江戸表江訴訟奉申上度儀有之、京都於

御役所御添翰奉願、願之通御添翰被下置候御事、

一 宝暦十一巳年十一月田舎より春米・餅・白米・大豆京都江多

持込、素人直買致候二付、京都米商売仕候者家数致減少商売薄ク相成候二付、他所より米穀持込候宿并取捌致候直買之素人共江御差留奉願候処、願之通町方江御触被 成下候御事、

附 宝暦十式年午十二月

田舎より持込候米穀素人直買不仕候様又々御触流奉願候処、願之通町方江御触被 成下候御事、

又 宝暦十三未年十月

右之通之御触書被 仰付被下候御事、

一 明和元年申七月京米屋中惣代拾菰人より奉願、前々之通米会所ニ而御米売買相場相立候儀奉願候処、同十月願之通

御免被為 仰出候御事、

附明和七年寅正月

三条裏町新建地面江売買場計引移り之義奉願候処、願之通被 仰付候御事、

一 御用米会所被為 仰付候取初訳書右ニ奉申上候通ニ而、御冥加銀差上候義者無御座候、前々御藏米売買之義者、二條御藏場ニ而諸渡り米有之候節、寄集候米屋共売買仕候、又者自宅ニ而売買仕候二付、御藏米之相場京中米屋共江不行届義も御座候二付、御用米会所被 仰付候以後者会所ニ而売買仕、日々御役所江相場書差上來候処、去ル申年より右売



買場相場立御免被 成下候二付、壹ヶ年ニ為御冥加銀貳拾枚宛毎年十月東 御役所江奉差上候御事、

但明和九年辰四月右御冥加銀御増被為 仰付、銀壹枚相増、同安永元辰年十二月より毎年銀貳拾壹枚宛東

御役所江御冥加銀奉上納候御事、

一 宝曆十貳午年

御所御買上米三百五拾石始而被 仰付、其後年々百石貳百石且五百石亥年子年より者格別石数多ク、三千石・四千石ニ至り被 仰付候処、京都之義者手狭キ所ニ而一度ニ相調候義出来兼、殊ニ五畿内米ニ限り奉調進候御事故、御蔵御払米諸向江御渡被遊候、先方御払を買請奉納候而、聊利徳ニ不相拘御用相勤候二付、御買上米入札ニも不被 仰付、米会所之直段積りニ而被 仰付候御事、

附明和六年丑七月

二条御蔵ゝ 禁裏之御蔵江御取替米山城・丹波直段相立、殘米有之候節者米会所江被為 仰付、代銀五十匁限り奉請負候御事、

一 明和六年丑十一月米屋共売払滞奉願候節、銘々居町ニ不相拘米会所頭取・組頭之内一人付添御取立被 成下候様一統奉願上候処、願之通被為 仰付候御事、

一 明和七寅年七月米筋御用相勤来候以規模、頭取・組頭之も

の共何事ニ不寄自分ニ奉願候義有之候節者、居町ニ不相拘直ニ願書奉差上候様両 御奉行様御通達之上御赦免被 成下候御事、

一 明和九辰年大津表御支配被為 仰付候後者京御用米会所頭取三人・組頭三人ニ而相勤、大津表御用米会所儀者相分レ申候二付、御定札御書改被成下候、左之通、

# 定

## 米屋頭取

龜屋 六右衛門  
伏見屋七郎兵衛  
沢屋 武兵衛

## 米屋組頭

堺屋 弥兵衛  
升屋 弥太郎  
堺屋 宗兵衛

一 二條御蔵御払米有之候節者頭取并組頭承之米屋共江触流仕、順宜大勢召連出候様可致候事、

一 壹万石御囲米之儀者頭取并組頭引請、銀上納等之儀茂是迄之通可相勤事、

一 入札之節者米屋共大勢組合候而も入札為致、直段上ヶ等茂有之候様可致吟味事、

一 御蔵御払米御役料等之儀者申渡有之次第入札も為致、札人

無之節者頭取并組頭引請、米屋共江割渡相捌候様可仕事、

一諸渡米致方右同斷、

一会所手代共諸方々之入米等之義可致吟味事、

一日々相場書御役所江当番頭取・組頭名前二而差出可申候、

尤頭取・組頭之内持參可仕候事、

一米屋共増減相届、惣体之触流末々迄江取締可致支、

一米屋共惣数増減茂相知候ために候間、会所より印札相渡置

可申事、

一毎月米屋共買入・売出し委細書附両 御役所江差出可申事、

一上京・中京・下京之内米屋之内粍人宛月行夏附置、触流茂

為致候様可致事、

右之通無相違相勤可申事、

明和九年

辰四月 播 磨

丹 波

一新規御囲米・定式御囲米・御遣方残米・御大豆共御払之儀、

御用米会所江不残被為 仰付被下候二付、是迄御米代銀百

五十日延二奉上納候處、尚亦式百十日御延二被為 仰付被

六十日延二 成下都合三二百

下候ハ、御米并御大豆とも御払之分老石二付四匁四分三

厘ツ、御冥加銀可差上趣奉伺候所、去年六月々再応御吟味

被成下、願之通三百六十日延二上納仕候様翌末三月朔日奉

蒙 御下知候、去年十一月定式御囲米御払始々右之通二可

取計旨、当末三月十日尚亦奉蒙 御下知候、壹ヶ年分御払

高計立式万石二御冥加銀八拾八貫六百目相当り申候御事、

一新規・定式御囲米并御遣方残米・御大豆とも会所江引請

被為 仰付候二付、御定札御書改御願奉申上候處、御書改

被為 成下候、左之通、

定

米屋頭取

亀屋 六右衛門

沢屋 武兵衛

堺屋 宗兵衛

米屋組頭

大津屋長 兵衛

一文字屋弥兵衛

坂本屋善 兵衛

一二條御藏定式・新規御囲米式万石其外御遣方残米・御大

豆御払相成候分頭取・組頭引請候儀二付、御払直段積申附

候節者別而入念、時々相場米屋共年行夏相集相紀候上、相

定置候増銀等差加、引請直段積書附差出可申、尤御払代銀

之儀者計立相済、於御藏場米請取切候日々日数三百六十日

延、且亦御払米之内を以御買上米二相成候節者代銀相渡、  
是亦三百六十日延兩様共御払代銀御定日限無滯東 御役所  
へ相納可申事、

一定式・新規兩御囲米其外御遣殘米・大豆代銀三百六十日延、  
冥加銀計立壹万石二付四拾四貫三百目宛之積を以相納可申、  
并御払米之内を以御買上米二相成候分代銀相渡、三百六十  
日延冥加銀者計立壹万石二付三拾四貫目宛之積を以相納可  
申、勿論冥加銀納方者口々之御払代銀納切相成候節、一口  
分冥加相束ね無滯東 御役所江相納可申事、

一米代銀相滯及出訴候ハ、為替滯並嚴敷取立可申付事、

一御役料米等之義者申渡有之次第入札為致、札人無之節者頭  
取并組頭引請、米屋とも江割渡相捌候様可仕事、

一諸渡米致方右同斷、

一会所手代共諸方々之入米等之儀可致吟味事、

一日々相場書御役所へ當番頭取・組頭名前二而差出候可申候、  
尤頭取・組頭之内持參可仕事、

一米屋共増減相届、惣体之触流し末々迄無滯可致事、

一米屋共惣数増減相知候ために候間、会所より印札相渡置可  
申事、

一毎月米屋とも買入・卖出委細書附、兩 御役所江差出可申  
事、

一上京・中京・下京之内米屋之内売人宛月行支附置、触流シ  
茂為致候様可致事、  
右之通無相違相勤可申事、

安永四年 信濃

未四月

越前

一二條御藏御払米御直段引立可申趣、御役料取捌方諸渡米致  
方諸方々入米等之儀吟味御触流、日々相場書・米屋取より、  
増減之届々、印札、米屋買入・卖出書上等御定札二御書記  
被成下奉頂戴罷有候上、兩 御奉行様御交代被為 有候度  
毎二御書改被成下候御事、

一定式・新規兩御囲米并御遣方殘米・御大豆共御払被為仰附、  
直段書差上候儀二付直段相考方左之通奉申上候、

此儀毎日書上仕候相場立方、大坂表上米相場二運送掛り  
物売石二付売匁式分相加書上候、此外三分直段増仕御払  
之度毎二書上候御儀御座候、其上大坂浜方上米相場二運  
送売石二付売匁式分并三分直段増御加へ被為 成、御見  
競之上私共より書上候御払米直段下直之分者直段増被為  
仰附、御見競直段突合御払被為 仰附候御儀御座候、然  
とも京都相場考方二より御見競相場が私共書上候御払米

直段高直之時茂粗有之候節者、失張私共々書上候直段ニ  
而御払被為 仰付候、右之冥加銀式匁都合三百六十日延、  
御冥加四匁四分三厘宛壹万石代銀皆納之節相束ね奉上納  
候御儀御座候、

安永四年未五月九日

一 大津御藏御払米度毎二京御用米会所より入札被 仰付、  
兩御役所於御取締方入札披有之、大津御支配相分り候以後  
毎年京都江落札相成候節者京都御用米会所江引請、御囲米  
割請之米屋共江割渡申候事、

一 御囲米代金銀会所が貸附、返済相滞候者とも江御取立奉願  
候節者、為御替金銀滞並御奉行様於 御前御日限被為 仰  
附被下、米筋御用向多相勤候依規模、頭取之分者御前御上  
縁江罷出候様被為 仰付被下候御事、

尚亦兩御囲米ニ而式万石相成被遊也、会所表手足り不申  
候二付、天明元丑年九月迄六人ニ而相勤來候処、式人増  
人願之通被 仰付被下、當時八人ニ而相勤申候御事、

定

米屋頭取

龜屋 六右衛門  
沢屋 武兵衛  
一文字屋 弥兵衛

米屋組頭

丹後屋 九兵衛  
十一屋 文治郎  
伏見屋 八兵衛  
伊丹屋 与兵衛  
龜屋 茂七

一 前文之通今般御定札御書改被成下候御事、

越前  
伊豫

一 前文之通今般御定札御書改被成下候御事

和泉  
大隅

一 前文之通今般御定札御書改被成下候御事、

定

米屋頭取

龜屋 六右衛門  
沢屋 武兵衛  
伏見屋 八兵衛

米屋組頭

伊丹屋 与兵衛  
金屋 九兵衛  
丸屋 久兵衛

天明八年 筑後  
申十二月 美濃

一 前文之通今般御定札御書改被成下候御事、

寛政元年 美濃

西十二月

下野

一 前文之通今般御定札御書改被成下候御事、

寛政四年 下野

子正月

伊勢

一米会所拝借金銀不納仕不埒二付、私共貸附證文差出返納方勘弁可申旨被為、仰付貸附方相糺候処、当時会所二少々貸附證文有之候得共、多分去ル申年火災後家出・死失所々江散在行衛不知ものにて、用立候證文聊故上納之手立二可相成茂無御座、尤去ル卯年御囲御払米代銀上納之節、貸附銀火急ニ取立、不調之分者内銀主共江相渡振替御払米代銀上納仕候処、火災之節帳面頼焼仕内銀主も相分り不申、旁證文取集之義も難出来、依之返上納方品々勘弁仕、以来会所仕法等ケ條書を以御願申上御聞届被成下候ハ、壹ケ年二銀式拾貫目宛上納可仕旨、尤子年以来之滯利足御免被成下候様、寛政五年丑十二月会所役五人、貸附方惣代六人連印仕御願奉申上候処、去辰六月願之通被為、仰附難有奉存候、則去冬半年分銀拾貫目上納仕候御儀御座候、勿論式拾貫目之外随分増方之儀も勘弁出情可仕旨被、仰附奉畏候、去辰七月米会所役之者死失并病氣之者も有之、無人二付米

方惣代与唱米屋之内八人私共故障之節者同様ニ罷出候様奉

願上候処、御聞届被成下難有奉存候、左候ハ、大坂〆為登

米舟積等之儀過書座年寄江懸ケ合取計、上納等之出情二も

仕度申立候義御座候、

一 壬生村相場立売買場之儀、御吟味之上願之通天明七年未十

月引移「之節迄相統」仕相勤候事、

一 加茂川筋北孫橋町相場立売買「當已七月朔日奉願上候処、

願之通被、仰付、早速引移「相統仕」相勤候事、

定

米屋頭取

中村屋久 兵衛  
亀 屋治左衛門

米屋組頭

都倉屋與 兵衛  
奈良屋長 兵衛

一 前文之通今般御定札御書改被 成下候ヌ、

寛政十年 伊勢

午正月

信濃

一米筋御用二付、米屋一統江申達之義、触世話人と唱百式拾人計有之、右之者とも諸事相達来り候処、会所無人二而  
△行届兼候間、右触世話人〇  
多人數△〇之内九組ニ相分ケ、壹組ニ而式人宛都合拾八人

年行事と唱、以来者年行支を以何事ニ不寄申達候様仕度旨  
御願奉申上候処、其後触世話人之内為惣代六人被 召出、  
右差支之有無御尋被遊候処、一統々会所同様奉願上候旨御  
答奉申上候間、願之通御聞届被成下難有奉存候御事、

(付紙)「寛政十二年」

一 当申三月十八日東御役所江被 召出、米会所之義者享保年  
中より有来り新規之義も無御座、米穀直段之義者諸国引合筋  
ニ而猥ニ相成候而者差支之義ニも出引ニ可致、其上会所より  
日々御役所江相場書差上取締候為ニも御座候ニ付、是迄之  
通御差置被遊旨被 仰渡候事、

一 同四月米屋中印札前々之通於 御役所御渡被成下候様奉願  
候処、御聞濟被成下難有奉存候、其後印札并米屋名前帳相  
調奉持参、同閏四月廿八日より一日ニ米屋式百人計宛召連罷  
出、東西御勘定方御役人中御立合ニ而東於 御役所右帳面  
ニ米屋共印形御取被遊候上、印札夫々御渡シ被成候事、

但、此後新加入并株替・名前替在之候節、其時々御伺申  
上候ハ、此度之御振合ニ而右帳面御書かへ印札御  
渡シ可被成下段御聞濟被成下候事、

一米会所役人共詰合候住居之儀者取初々今に借宅仕、則唯今  
之所新し町今宮御池下ル町西側ニ御座候、尤毎日頭取・組

頭其外米方惣代・貸附方惣代之内式人宛当番相究メ、朝五  
ツ時過る夕七ツ時迄相詰申候、別而當時御太切之御上納手  
配り等仕候得者、残り之者共御用之節不残出勤仕、其外手  
代式人・下男式人、是等者会所ニ住居仕候、  
右御用米会所仕来り・由緒之儀奉申上候様被為 仰附候ニ付、  
書附を以右之通奉申上候、以上、

寛政十三年申七月 御用米会所

(付紙1)「文化九年申十一月」

(付紙2)「文化十年酉四月」

(付紙3)「文政三年辰三月」

定

米屋頭取

中村屋久 兵衛  
龜 屋次左衛門

米屋組頭

都倉屋与 兵衛  
奈良屋長 兵衛

一 前文之通今般御定札御書改被 成下候事、

寛政十式年申正月

信濃  
和泉

定

米屋頭取

龜 屋次左衛門  
都倉屋与 兵衛

米屋組頭

奈良屋長 兵衛  
伊勢屋市 兵衛

一 前文之通今般御定札御書改被 成下候事、

寛政十二年申八月

和泉  
越前

乍恐奉願口上書

一 御用米会所米相場売買所加茂川筋北孫橋町相応之借屋建家

在之候二付、借請引移有之候処、右場所不繁昌ニ而永々相

休ミ罷在候二付、此度西寺内丹波海道町近江屋忠兵衛借屋

并町中持地面借請、右場所江米相場立所引移申度奉存候、

尤大業成儀二者無之、仕来之通ニ而新規成儀者曾而不仕候、

何分日々相場立候儀無懈怠米屋共相集メ場所相続仕度奉存

候、引移之儀乍恐奉願上候、御慈悲之上御聞届ケ被成下候

ハ、難有可奉存候、以上、

享和元年酉三月

御用米会所

奈良屋長 兵衛

都倉屋與 兵衛

龜 屋次左衛門

中村屋久 兵衛

御

（貼紙） 一 加茂川筋北孫橋町米相場売買所之儀、右場所不繁昌

ニ而永々相休罷在候付、西寺内丹波海道町近江屋忠

兵衛借や并町中持地面借受、右場所へ引移申度存之、

享和元年酉三月御願申上候処、同四月朔日御聞済ミ

被下候事、

一 右丹波海道町米相場立所破損仕、今上支配人も病氣

ニ御座候付、小川通御池上ル町沢や専十郎借やへ引

移り申度候段、享和二年戌十一月十八日御願奉申上

候処、同十二月七日御聞済被成下、当時相借り仕相

勤候事、

役方四人

前文之通御定札御書改被成下候事、

文化三年 越前

寅七月

大和

四

壬生村相場者売買場之義破損仕、其上右場所不  
繁昌ニ付、其上通烏辻上ル町さのや道下地面借  
り受、右場所へ引移り申度候段文化四年卯八月  
奉御願申上候処、同十一月廿四日御聞濟被成下、  
當時相借り仕相勤候事、

乍恐御請書

一 加茂川筋北孫橋町在之候御用米会所米相場売買所不繁昌ニ  
而永々相休ミ罷在候ニ付、此度西寺内丹波海道近江屋忠兵  
衛借屋并町中持地面借請、売買仕度奉願候処、願之通御聞  
濟被成下難有仕合奉存候、尤右売買ニ事寄セ紛敷儀仕間敷、  
入念候様被為 仰渡之趣奉畏候、依之乍恐御請書奉差上候、  
已上、

御用米会所  
享和元年酉四月朔日

中村屋久 兵衛  
龜 屋次左衛門

都倉屋與 兵衛  
奈良屋長 兵衛

御

〔貼紙〕五

右場所段々不繁昌ニ罷成候付、同六年巳十二月猪  
熊上長者町下ル町町中持所并地面借り受、右場所  
へ引移り申度候段奉願上候処、同七年午正月十五  
日御聞濟被成下、此節道相借り仕罷在候事、

定

米屋頭取 龜屋次左衛門  
都倉や与兵衛

米屋組頭 奈良や長兵衛  
伊勢や市兵衛

前文之通九枚御定札御書改被成下候事、  
文化八年 和泉

未九月 飛驒

一 近來田舎々米穀多持込、町方素人米売増長仕、米  
屋共渡世薄困窮仕候ニ付、文化元年子四月直買御  
差留御触流之儀奉願上候、其後度々奉追訴候処、



御憐愍を以当年正月素人直買不相成候儀、山城国  
中御触流被成下難有奉存候、

乍恐口上書

河原町竹屋町上ル町 長浜屋長 兵衛

知恵光院笹原町下ル町 舛屋弥太郎

小川御池上ル町 沢屋八郎助

右同町 舛屋丈助

河原町二条上ル町 近江屋小 兵衛

先達而御免被成下候西寺内丹波海道町米相場立所破損仕、  
其上支配人甚四郎病氣御座候二付、此度京都湊株米屋之内  
右名前之者共江支配為致、小川通御池上ル町沢屋専十郎借  
屋江引移、市中米屋計米相場相続申、少々宛売買仕度旨米  
屋共申之候、尤是迄外々ニ而相場立仕候儀与者違立会者決  
而不仕、手寄米屋共計ニ而大業成義ニ而者毛頭無御座、新  
規之儀者曾而不仕候間、則先例書奉入御高覧候、何卒願之  
通御聞届被成下候ハ、難有奉存候、乍恐此段奉願上候、以  
上、

御用米会所  
享和二年戊十一月十八日 伊勢屋市 兵衛

奈良屋長 兵衛  
都倉屋與 兵衛  
龜屋次左衛門

御

乍恐口上書

一 御用米会所売買相場所之儀、宝曆十辰年々右相場立相休ミ  
居申候所、明和元申七月下旬於米会所相場立仕度旨御願奉  
申上候所、願之通御免被為成候事、

一 安永二年巳十二月奉願、油小路竹屋町上ル町米会所ニおゐ  
て米相場立御免被為成候事、

一 安永七年戊十月奉願、右米会所間狭二付、隣家江引移り米  
相場立御免被為成候事、  
右之通御座候、以上、

享和二年戊十二月 御用米会所

就御尋口上書

此度御願奉申上候小川通御池上ル町ニ而米売買所之儀、右  
之米屋共日々寄合候而五石拾石之潰し米重ニ売買仕候、尤  
御城米等買持之者茂右場所ニ而売買仕度儀ニ御座候、左候

ハ、直段行届、且者市中米屋共取締触相成、又者手狭キ米屋共者猶更勝手ニ相成候二付、此度先規之振合を以御願奉申上候御儀ニ御座候、就御尋此段奉申上候、以上、

戊十一月廿七日  
御用米会所

都倉屋與 兵衛  
奈良屋長 兵衛

乍恐御請書

一 西寺内丹波海道町ニ而米会所米相場売買仕候処、右場所破損仕、其上支配人甚四郎病氣ニ而難相勤候二付、此度湊株米屋共之内ニ而支配為致、小川通御池上ル町沢屋仙十郎借屋借請市中米屋共計米相場相統、少々宛売買仕度旨奉願候処、取締ニ茂相成候趣奉申上候二付、願之通御聞届被成下難有仕合奉存候、尤右売買仕候ニ付大業成義者勿論右ニ事寄セ紛敷儀仕間敷、市中米屋共之外為立入申間敷旨被為仰渡候趣奉畏候、依之末々之者共江茂右之段申聞、後年ニ至り候而茂心得違無之様可仕候、依而御請書奉差上候、以上、

享和二年戊十二月七日  
御用米会所

伊勢屋市 兵衛  
奈良屋長 兵衛  
都倉屋與 兵衛  
龜 屋次左衛門

御

定

頭取 龜 屋次左衛門  
都倉屋與 兵衛  
奈良屋長 兵衛  
伊勢屋市 兵衛

一 前文之通今般御定札御書改被成下候御事、

文化三年

寅七月 越前  
大和

乍恐奉願口上書

一 御用米会所米相場売買所壬生本郷ニ相応之借屋建有之候ニ付、御免之上去ル天明七年未七月借請引移り売買相場立相統仕来り候処、右場所及被損ニ暫相休ミ罷在、別而近來不繁昌ニ付、此度岩上通高辻上ル町美濃屋八三郎借屋并地面借り請、右場所江米相場会所引移申度奉存候、尤大業成儀ニ而者無之仕来之通ニ而新規成義者曾而不仕候、何分日々相場有之儀無懈怠米屋共相集メ場所相統之儀仕度奉存候、引移り候義奉願上候、乍恐 御慈悲之上 御聞届被成下候者難有可奉存候、以上、

文化四年卯八月三日

御用米会所  
組頭 伊勢屋市兵衛  
同 奈良屋長兵衛  
頭取 都倉屋与兵衛  
同 龜屋次左衛門

御請書

一 壬生本郷ニ而米会所米相場売買仕候処、右場所被損仕難相勤ニ付、此度岩上通高辻上ル町地面借請米相場売買仕度右場所替之儀御願奉申上候処、願之通 御聞済被成下難有奉存候、右ニ事寄大業成義者勿論紛敷義等仕間敷、猶又右之段末々之者迄も申聞、後年ニ至リ候而も心得違無之様可仕旨被 仰渡候様奉畏候、依之御請書奉差上候、以上、

文化四年卯十一月廿四日 御用米会所  
組頭 伊市兵衛  
同 奈良長兵衛  
頭取 都与兵衛  
同 龜次左衛門

〔朱書〕  
「右願之義東御勘定方江差上御座候処、

東様 御喪中ニ付、西様於御前被仰渡候事、

牧野様

御立合

関三次郎

小木三藏

乍恐口上書

一 去冬御願申上御聞済被成下候岩上通高辻上ル町御用米会所米売買所之儀、右場所取繕ヒ出来仕候ニ付、来ル十七日ハ米売買相始メ申候間、此段御届奉申上候、已上、

文化五年辰正月十四日

御用米会所  
頭取 都倉屋与兵衛  
米方惣代 近江屋七兵衛

(以下綴じ込み合冊分)

乍恐奉願口上書

一 御用米会所米相場売買所岩上通高辻上ル町美濃屋八三郎借屋地面相応之場所ニ付、御免之上去々卯十一月借請引移リ売買相場立相続仕来リ候処、米屋寄勝手悪く売買等薄ク不繁昌ニ付、何卒此度猪熊通上長者町下ル町町中持家并地面借り受、右場所へ米相場立所引移リ申度奉存候、尤大業成儀ニ而者無之仕来リ之通ニ而新規成儀曾而不仕候、何分日々相場立之儀無懈怠米屋共相集場所相続仕度奉存候、引移り候儀乍恐奉願上候、御慈悲之上御聞届被成下候ハ、難有可奉存候、以上、

文化六年巳十二月十九日 御用米会所  
組頭

伊勢屋市兵衛  
同 奈良屋長兵衛  
頭取 都倉屋与兵衛  
同 龜屋次左衛門

御奉行様

乍恐御請書

一 岩上通高辻上ル町美濃屋八三郎借屋并地面借受御用米会所  
米相場売買場所所在之候処、右場所米屋共寄勝手悪敷売買等  
も次第二薄ク相成不繁昌ニ付、此度猪熊通上長者町下ル町  
町中持家并地面借受売買仕度奉願候処、願之通御聞届被成  
下難有奉存候、尤大業成儀者勿論石売買ニ事寄紛敷儀仕間  
敷、入念候様被為 仰渡候様奉畏候、仍之御請書奉差上候、  
以上、

文化七年午正月十五日 御用米会所  
龜屋次左衛門  
都倉屋与兵衛  
奈良屋長兵衛  
伊勢屋市兵衛

御奉行様

代平兵衛 附  
付箋「当病ニ付  
代米屋平兵衛」

定

米屋頭取 龜屋治左衛門  
都倉屋與兵衛  
米屋組頭 奈良屋長兵衛  
伊勢屋市兵衛

一 前文之通今般御定札御書改被成下候御事、

文化八年 和泉

未九月

飛驒

一 近來田舎々米穀多持込ミ町方素人直買増長仕、米屋共渡世  
薄ク困窮仕候ニ付、文化元年子四月直買御差留御触流之儀  
奉願上候、其後度々奉追訴候処、御憐愍を以文化九年申正  
月素人直買不相成候儀、山城國中御触流被成下難有奉存候  
御事、

定

米屋頭取 奈良屋長兵衛  
伊勢屋市兵衛  
米屋組頭 大和屋重右衛門  
伏見屋嘉兵衛

一 前文之通今般御定札御書改被成下候御事、

文化十年 飛驒

酉四月

肥後

定

米屋頭取

奈良屋長 兵衛  
伊勢屋市 兵衛

米屋組頭

大和屋重右衛門  
伏見屋嘉兵衛

一 前文之通今般御定札御書改被成下候御事、

文化十二年 肥後

亥六月

伊勢

一 当会所之儀而御役所より多分之拝借金銀返納方相滞候二付、

御取調被成下、御憐愍を以寛政年中より無利足無年限年賦上

納被 仰付、年々片

御役所江銀拾貫目宛兩

御役所江都合式拾貫目宛年賦上納仕来り候処、米屋共近来別而困窮弥増、軒数も次第第二相減、右上納割合銀等出シ兼候者多ク、上納銀都合不仕借入銀等仕、去ル子年迄者漸無滞年賦上納仕候得共、外二銀子之出方無之、年々借銀相嵩

ミ利足二被進、元銀返済之期も無御座、米屋共出銀仕候より外仕方無御座候処、出銀集リ兼、此上年々上納不足之足シ銀等可仕手便無御座、其上近来田舎米多御当地江入込ミ、米捌方不宜候二付、毎々御触流又者御吟味被成下候得共相止ミ不申候哉、捌方薄ク、米屋共一統衰微ニ而会所相統難仕、迎も毎年式拾貫目宛上納之才覚方無御座、甚々難渋至極仕候二付、乍恐右式拾貫目上納銀去丑年分より十五ヶ年之間御減少被成下、一ヶ年二片

御役所江銀五貫目、而 御役所江銀拾貫目宛奉上納度御聞届ケ被成下候ハ、右年限之間ニ会所借銀済方仕申、六ヶ年目より是迄之通上納銀無滞而 御役所江式拾貫目宛年々相納メ、会所相統仕度旨文化十四年丑三月御歎願奉申上、猶又文政元年寅十二月再応奉願上候処、同二年卯十月十五日東 御役所江米会所頭取・組頭・米方惣代上京・中京・下京米屋年行夏共連印仕御願奉申上候者とも被為 召出、格別之御憐愍を以御聞済被成下候段被 仰渡難有奉畏候、御請書奉差上候御事、

一 米会所役人共詰合候住居之儀者取初より今二借宅仕、則唯今之所新し町御池下ル丁西側ニ御座候、尤毎日頭取・組頭其外米方惣代・貸附方惣代之内式人宛当番相究、朝五ツ時過より夕七ツ時迄相詰申候、別而当時御太切之御上納手配り等

仕候得者、残之者共御用之節不残出勤仕、其外手代式人、  
下男式人、是等者会所住居仕候、  
右御用米会所由緒并仕来之儀奉申上候様被為 仰付候二付、  
書付を以右之通奉申上候、以上、

文政三年辰三月

御用米会所〇

〔綴じ込終〕

御定日御取立願入用定

一 願高壹貫目迄

金壹歩

一 同 三貫目迄

同貳歩

一 同 五貫目迄

同三步

一 同 八貫目迄

同壹両

一 同 拾貫目迄

同壹両壹歩

一 同 拾五貫目迄

同壹両貳歩

一 同 貳拾貫目迄

同壹両三步

一 同 三拾貫目迄

同貳両

一 同 四拾貫目迄

同貳両貳歩

一 同 五拾貫目迄

同三両

右者御囲米代金銀 御役所金銀共御定日御取立奉願候、筆  
紙墨料御座候、御囲米代金銀御定日御取立之内追々御目限  
相重り候得者悉手錠被 仰付候、其後者別訴二相成申候、  
左候得者尚又別段入用相懸り申候、是者追訴之度数二応入

用御差出被成候迄、

但御定日御取立新訴二而御日限請不申候内、致々済候

共出訴二相成候上者度数二不拘前書之通御差出被成  
候迄、

一 取初々別訴二相成候者ハ、其節々振合二応シ入用御差出被  
成候迄、并家貫之節、

但出訴前二入用金御差出被成候迄、

文政十一年正月改

〔朱書〕会所御物払仕定書古二相分候得者見当

候二付、安政四巳年六月朔日書記置候事、